

中国古典詩歌「詞」の身体性に関する考察

楊 冰 (大阪公立大学)

本論は中国の古典詩歌の一種である「詞」の身体性を考察する。

古代の中国では、作詩は単なる文学的な行為にとどまらず、官僚選抜の試験に用いられる、政治的な行為でもあった。政治に参加する人たちは、「士君子」と呼ばれている階級で、儒教の経典を最上な書物とする人たちである。従って、詩の表現される主題や表現される感情に至るまで、常に「士君子」の理念がつきまとうことになった。結果的に、表現の自由も制限されてきた。だが、ここでいう詩は、五言・七言詩であって、本論の対象である「詞」ではない。「詞」も一種の定型の韻文であるが、長短句のいりまじる形式を持ち、狭義の詩（五言・七言詩）とは一応区別する。「詞」は「詩餘」とも呼ばれ、すなわち詩の外側に位置するもので、詩より一段低い通俗なものと、長いあいだ考えられてきた。だが、この「通俗的な」文学には表現の自由があった。

「詞」の表現の自由に最初に着目し、作者の真実な内面性を探求したのは、近代中国の美学者王国維である。筆者は今まで王国維の詩論『人間詞話』を考察してきた。これまでの研究で、王国維は「詞」における作者の内面性だけでなく、身体の表現にも注目していたことを明らかにした。だが、王国維は、詞の身体性を具体的に考察しなかった。一方、今までの「詞」の研究では、「身体性」という美学的な観点からの論考もなかった。本発表は王国維が最も評価した、五代の南唐という国の君主李煜の「詞」の分析を中心に、身体性の特徴を捉える。さらに李煜に影響を与えた晩唐の李商隠、李煜の影響を受けた宋代の詞人秦觀、及び女性詩人李清照の作品にも触れ、中国の「詞」における一つの身体論を整理する。詞の解釈の方法において、王国維及び彼の手法を受け継いだ、葉嘉瑩、繆鉞、俞平伯などの方法論を参考にする。具体的に、文字の意味と発音の両方に重きを置き、二つの「質感」に注目する。一つは軽重、精粗などの「意味的な質感」で、もう一つは唇・歯・唇・舌音による「音声的な質感」である。この二つの「質感」を通じて、詞に表現された身体性を明らかにする。結論を先取りに言えば、李煜の詞において中国の古典詩歌ではじめて、心臓の鼓動が聞こえてくる「生きている身体」が誕生した。さらに、李煜は外界と内面の寒暖、甘苦などを敏感に感じとる、環境と渾然一体となる身体を表現した。これは単なる肉体的な身体ではなく、感覚や感情を通じて表現された身体的な経験である。このような身体的経験は宋代の秦觀、及び女性詩人李清照によって受け継がれてゆき、中国の古典詩歌における新たな身体表現の脈絡となった。